



谷野亮爾, 井上新平, 猪俣好正, 他 編

解説と資料 精神保健法から障害者自立支援法まで

伊勢田堯

時宜を得た出版とは、本書の出版をいうのではない。2005年10月に障害者自立支援法が、精神保健福祉法一部改正とともに成立し、精神医療保健福祉サービスが大きく変わる時期であり、その対応が臨床現場でも求められている、まさにその時にタイムリーに出版されたからである。

評者のように、行政に働く者にとっても昨今の矢継ぎ早の改革案と法律を消化するのに、正直言って相当の努力を必要としている。ましてや、臨床に忙殺される現場にとって、難解な行政用語と行政文書であることも考えると、臨床現場に応用できるまでに理解することは、至難の業ではないだろうか。とはいっても、臨床現場も法律の下で仕事をしなければならないので、知らなかったでは済まされない。そういった現場の臨床家のニーズにタイムリーに応えたのが本書である。

本書には、まず最初に、現在を理解するために必要な精神保健医療福祉重要施策の20年の年表と、これらの背景となった厚生労働省・障害保健福祉部の組織の変遷(1987→2005年)が載っていて、非常に便利である。この20年間の基本的な動向を鳥瞰できるからである。

本文は、解説と資料を3部構成でまとめている。第1部と第2部は解説、第3部は資料編である。第1部は、障害者自立支援法と2005年精神保健福祉法の改正に当てられ、本書の中核部分である。第2部は、そこに至る20年間の重要施策が解説されており、どのような経緯で障害者自立支援法と2005年精神保健福祉法の改正に至ったかが理解できる。第3部の資料編には、以上の解説の根拠になった法律や報告書が載っている。

本書の最大の特色に豪華な執筆陣がある。それも、審議会委員経験者など報告書や法案に直接的、間接的に関係した人たちが中心になっていることがある。政府担当者の執筆になると公平で誤解を

生まない記述が中心になり、勢い文章が長くなり、行政文章になれていない現場の臨床家にとってはわかりにくいものになるという弊害がある。そのためか、政府関係者は執筆陣から外されている。その上に、審議に加わった立場から見た見解(批判的意見を含めて)が書かれているので、無味乾燥と見える行政文書も、要点と争点が明確になって、ダイナミックに理解しやすい。しかも、誤解を恐れず要点を明確に書いてあるので、骨子を理解しやすいのも助かる。

資料も同様の趣旨で紹介されている。法律や報告書の全文ではなく、ポイントがまとめられてあり、しかも、必要にして十分な範囲にとどめてあるので、理解しやすい。

以上見てきたように、本書は現場の臨床家にとって便利なだけではない。行政に携わる人々や広く精神保健福祉の関係者にとっても、今日の混沌とした移行期の時期にあって、つい基本的文脈を見失ってしまうことがある。そうした際に法改正の基本的流れを整理し、本質の問題を再確認するために有益である。

まさに、精神医療福祉に携わるすべての人々が、その政策の由来・過去を知り、将来を考える上で、本書は座右の参考資料である。職場でも、個人的にも備えておきたい書と考える。

ただ、本書によってわが国の精神保健医療福祉の過去、現在、未来が見えてくるだけに、精神保健医療福祉の改革がこのペースで進められるのでよいだろうかという強い焦りを評者は感じてしまう。脱施設化をすでに完了し、地域ケアを快調なペースで発展させている先進諸国の実状を知るにつけて、そういう焦りを感じてしまうのである。

(東京都立多摩総合精神保健福祉センター)

●A4 228頁 2005 定価3,675円(本体3,500円+税) 精神看護出版